

雑報

ミュージアム・ナイト・ツアー
—エンターテイメント的要素を伴う博物館展示解説の試み—

三田照芳・上原久志

群馬県立自然史博物館：〒370-2345 群馬県富岡市上黒岩1674-1

キーワード：展示解説，ツアーガイド，エンターテイメント，ナイトツアー

Museum Night Tour

— A trial of museum exhibition tour with entertainment-factor —

MITA Terufusa and UEHARA Hisashi

*Gunma Museum of Natural History:
1674-1, Kamikuroiwa, Tomioka, Gunma 370-2345, JAPAN*

Key Words : Exhibition tour, Tour guide, Entertainment, Night tour

はじめに

群馬県立自然史博物館（以降当館）は、2006年10月22日に開館満10年を迎えた。10周年を迎えるにあたり、来館者へ新たな解説サービスを提供することを目的として、博物館展示解説“ミュージアムナイトツアー”を企画し、実施した。

本ツアーは、当館の展示解説員が行っている展示解説と異なり、展示解説にエンターテイメント的要素を加えた。そのため開催時刻・内容・方法とも既存の展示解説と異なるものとなった。既存の解説は、解説者から参加者への知識の伝達が主体となっているが、本ツアーでは、知識の伝達を最小限にとどめ、参加者が解説者（ガイド）とともに感じ、楽しみながら学べる展示解説を目指した。実施時刻は、他の観覧者に気兼ねなく行える閉館後の時間帯とし、その内容は、引率するガイドが設定された役になりきり、参加者に臨場感を持たせ、参加者の心に届く演技をしながら解説した。また、真面目な解説ストーリーを基調としながら、長丁場を飽きさせないために展示物と関連のあるウィットをふんだんに盛り込んだ。会場設定では、展示室の照明を減光し、解説対象の標本を照らし出す照明効果の演出や、参加者を驚きや興奮と与えるイベントも用意した。

本ツアーは、これらの様々なエンターテイメント的要素と真面目なストーリーに基づく解説を通して、参加者に資料や展示の学術的意味、そしてその面白さや奥深さ

を、強く感じ取っていただけることを目標とした。

本稿では、ツアーの概要と実施後の参加者へのアンケート調査結果を報告し、今後の課題を提示する。



図1 ミュージアムナイトツアー風景

企画の概要

1 趣旨

本企画は、主に以下の4点を趣旨として実施した。

- ①当館の観覧者の約7割がリピーターである（群馬県立自然史博物館年報、2002～2005）ことから、既存の展示解説とは異なる新たな解説サービスを提供する。
- ②解説にエンターテイメント的要素を取り入れ、従来の知識伝達形式の解説から、参加者も解説者とともに体感する展示解説を行う。
- ③展示資料等の学術的意味やその面白さをわかりやすく効果的に伝え、自然に関する興味・関心を高めていただける解説ストーリーを持ったツアーにする。

- ④企画のネーミング、広報用のグラフィックを工夫することで、多くの参加者を獲得する。

2 構成

(1) 実施日時と募集方法

開館記念日(10/22)がある10月に合わせ、同月の土曜日に3回実施することにした。また、家族連れが参加しやすいように、開始時刻を日没前後とした。なお、申し込みが殺到し追加開催を強く希望する要望が多数届いたため、追加開催を11月11日に行った。募集対象は制限を設けず一般としたが、夕方であるため中学生以下は保護者同伴とした。また、受付方法は、実施日の1ヶ月前の9月7日より10月実施の3回を電話で先着受付し、11月11日は、10月11日より同様に先着受付をした。

表1 実施日時と募集人数

期 日	時 間 帯	募 集 人 数
2006. 10. 7	17:00~19:00	30名
2006. 10. 14	17:00~19:00	30名
2006. 10. 21	17:00~19:00	30名
2006. 11. 11	17:00~19:00	30名

(2) 実施体制

当館職員個々が持っている適性を考慮し、グループの枠を超えた活動的な組織をつくった。役割分担は以下のようである。

- 総括責任者(適切な指導助言が行え、当日の不慮の事態に備える。)

萩原正弘(学芸グループリーダー)

- 司会兼アシスタント(司会:ガイダンス等でしっかりと諸注意を伝達する。参加者の気持ちを盛り上げる。アシスタント:ツアー中の安全管理や参加者の掌握やガイドの補助を行う。)

野口喜充(総務普及グループ 指導主事)

金井英男(学芸グループ 指導主事)

武井郁也(総務普及グループ 指導主事)

- ガイド(展示標本や解説の内容を十分把握する。話術と演技力で参加者を引きつける。)

三田照芳(学芸グループ 指導主事)

上原久志(学芸グループ 指導主事)

武井郁也(総務普及グループ 指導主事)

- 企画監修兼天体ドーム担当(展示物や展示構成を熟知し、適切な助言を行う。天体の知識とドーム内の機器の操作を行う。)

高桑祐司(学芸グループ 学芸員)

- 解説監修兼記録(展示物や展示構成を熟知し、適切な助言を行う。)

姉崎智子(学芸グループ 学芸員)

このほか、展示解説員・案内員を各回2名加えて、ツア

ー補助員とした。

(3) 実施内容(表2)

夜であることから、ツアーの最後に天体観望も行った。

表2 ミュージアム・ナイト・ツアーの時程

内容項目	時 程	項 目 の 詳 細
受付準備	16:30~ 16:40	・学習室前に、受付を設置する。(MC) ・学習室のOA機器を立ち上げる。(MC) ・天体ドームの稼働と天候のチェックを行う。(G)
受 付	16:40~ 17:00	・トイレに行くことを促した後、受付し学習室に入室させる。(MC) ・受付時間中、ビデオ映像を放映する。(MC) (当館プロモーションビデオ)
ガイダンス	17:00~ 17:10	・あいさつ(MC) ・ツアーの趣旨説明 (10周年記念であること)(MC) ・ツアーの時程説明(MC) ・事故防止等の諸注意(MC) ・グループ分けの連絡(MC) ・ガイド紹介(MC) ・ガイド自己紹介(G) ・照明調整(警備員)
展示室 ツアー	17:10~ 18:20	○2班構成(1班15名前後、家族単位で分けるため) ○常設展示室、企画展示室の順で行う班をA班とし、この逆をB班とする。 ○1班にG1名、MC1名がつく 常設展示室ツアー ・展示資料を示しながら、解説を行う。順序はAから順にEまでとし、夜の動植物の生態(古生物も含む)や夜行性動物の特徴などを加えた解説を行う。(G) ・夜行性の解説パネルや専用の展示資料を用意(G) ・参加者の安全管理を行う。(MC,G) 企画展示室ツアー ・企画展の展示資料を示しながら、解説を行う。(G) ・参加者の安全管理を行う。(MC,G)
休憩・ トイレ	18:20~ 18:30	・学習室に戻り、トイレ休憩を取る。
天体観望	18:30~ 19:00	観望が可能な場合 ・エレベーターで屋上に移動させる。(MC) ・ドームの望遠鏡と移動式双眼鏡で観望させる。(G) ・天体の解説をする。(G) 観望が不可能な場合、学習室で、天体のスライドおよびビデオを上映しながら、天体の解説をする。
終了作業	19:00~ 19:15	・学習室に移動させる。(観望した場合)(MC) ・終わりのあいさつと諸連絡(MC,G) ・帰りの案内(MC,G)

※MC:司会兼アシスタント G:ガイド

3 解説の方法と内容

(1) 解説の方法

参加者30名を2班に分け、それぞれの班を、ガイド1名とアシスタント1名、さらにツアー補助員1名が引率し、案内した。案内する展示室は、常設展示室と企画展示室とし、前者45分間程度、後者25分間程度の解説を連続して行った。

(2) 解説の内容

既存の常設展解説マニュアル(平成15年作成)をもとに、開催中であった10周年記念企画展「コアラ大陸オー

ストラリア」(開催期間 2007.7.15~2007.11.26)の解説内容を加え、ミュージアム・ナイト・ツアー解説マニュアルを作成した。マニュアルはA4サイズ18ページとなった。

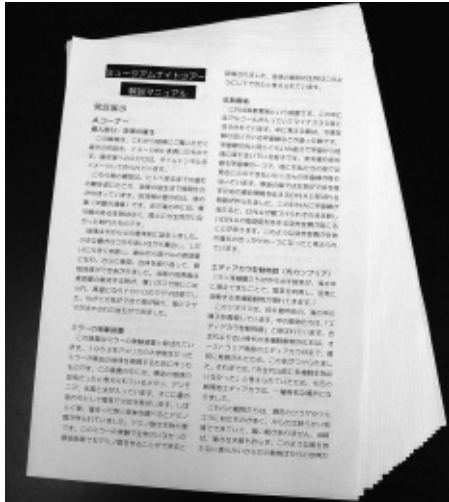


図2 ミュージアムナイトツアー解説マニュアル

4 解説会場の工夫

(1) 照明効果

館内や展示室内の照明を減光した。これは、単に“ナイト・ツアー”の雰囲気高めるためだけでなく、参加者をガイドの解説に集中させる効果や光と音を使った演出を効果的に行うことを意図した。常設展示室の照明は、200を超えるスイッチで制御できることから、ほぼ解説ストーリーに合わせたライティングが行うことができた。一方、企画展示室では、照明が数ブロックの一括操作となっているため、細かな調整ができず、天井に設置されているダウンライトを減光し、全体的に薄暗い展示室とした。



図3 減光した常設展示室Cコーナー

(2) 展示標本の追加

当館の過去の調査(群馬県立自然史博物館年報, 2002~2005)から、参加者の7割程度がリピーターであると予想されたため、新たに展示資料を追加した。具体的には、常設展2階Cコーナーの搬出入用大型エレベーター内に650kgのロシア産黒水晶を、あえてフォークリフトにのせたまま展示した。また、3回目以降は常設展1階Aコーナ

ーのデイトロドン全身骨格の奥に、実物大のデイトロドン復元模型を展示した。

5 エンターテイメント的要素

(1) 演技力を発揮するガイド

体感型の展示解説を提供するためには、演技力を持つガイドが必要と考えた。そこで、ガイドは、当館職員の中から教職経験が豊富で、展示解説の経験がある者を選定し、アシスタントや解説監修とともに5回のツアー解説の練習を行った。これにより、エンターテイメント的な仕掛けはもとより、解説にあわせた感情表現を伴う演技力の向上が図れ、体感型のわかりやすい解説が行える基礎ができた。また、自然への興味・関心を高められる解説ストーリーもつくることができた。

①ガイド役の設定

ガイド役の設定は有名な映画の役から引用し、インディ・ジョーンズの末裔インディ○○、ジャック・スパローの末裔ジャック○○と命名した。衣装や小道具もその役に併せて購入および製作した。ガイドはその役になりきって解説を行った。



図4 参加者と記念写真

②実感を込めた演技で伝えるガイド

参加者がともに体感できる解説を行うため、ガイドの解説を一方的な知識伝達から共感的な伝達へと変えた。具体的には、言葉のみで展示標本や展示エリアの持つ意味や意義を説明する機会を可能な限り減らし、ガイド自身の驚きや喜び、怒りや嘆きなどの感情を、実感を込めた演技で伝えることにした。また、参加者の反応を読みとりながら、適度にユーモアを加え、和やかな雰囲気づくりを行った。

③懐中電灯を用いたライトアップ効果

解説対象物に参加者の関心を集めるため、懐中電灯で解説する資料をスポット的に浮かび上がらせるライトアップを行った。さらに懐中電灯で、「あっ、あそこに○○が」「ここに○○が」と急に照らし出すことで、参加者に驚きや意外性を持たせることをねらった。

(2) アシスタントの協力による演出

①突然のライトアップ

常設展Aコーナーにあるガラス張りのボンベッド

(5×7m)は、大人でさえ恐る恐る歩く人がいるほどである。ツアーでは、伏えて動くティランノサウルス(実物大復元動刻模型)から安全な場所(ボンベッド)へ逃げ込むと、いきなり眼下の発掘再現現場が照らし出され、ガラスの板上に立っていることに気づくという演出を行った。



図5 ライトアップされたボンベッド

②聞こえてくる鳥の声・カエルの声

常設展Bコーナーのジオラマの解説で、アシスタントが離れた場所にある音声端末装置を操作し、ジオラマ内の鳥類や両生類の鳴き声を再生することで、解説に動物の鳴き声を組み込んだ。

③大扉をあけると巨大水晶

常設展Cコーナーに設置されている大型エレベーターは、普段大扉で隠されていて、一般には知られていない。そこで、ガイドの合図とともにアシスタントが大扉を開けると、フォークリフトに載った巨大水晶がエレベーターの中に登場するという演出を行った。

④肺魚の食事

企画展で生体展示していた肺魚は、夜間に活発になり餌もよく食べることから、口元に餌を落として、見ていただくことにした。

(3) ガイダンスの工夫

当館は、通常のイベントでは一般的な接客口調で説明や連絡を行うが、今回の企画の趣旨から、ツアーの開始時に、参加者の気持ちを高めておくことが必要と考えた。そこで、「ナイト・ツアー」の導入であるガイダンスの後半部から司会者の口調や表現を一変させ雰囲気づくりに心掛けた。また、ガイダンス最後のガイドの登場場面では、参加者の

拍手と呼び声の高まりを待って、ガイドが客席の裏手から登場する演出を行ったり、パワーポイントによるビジュアルなスライドショーを組み入れたりした。

6 娯楽性と学術的面白さの両立

本企画は、「展示資料等の学術的意味やその面白さをわかりやすく効果的に伝え、自然に関する興味・関心を高めていただける解説ストーリーを持ったツアーにする。」を趣旨の一つとして掲げている。この趣旨を達成するための手段の一つがエンターテインメント的要素であり、エンターテインメントが目的ではない。そこで、このツアーが単なるおもしろおかしいものにならないよう、各コーナーの解説ストーリーに、地球と生物の進化の歴史、群馬の自然と環境問題、自然保護への取り組みなどのテーマを設けた。さらに、ガイドの語り方も、真剣なとき、大げさなとき、ゆっくりと静かなときなど、メリハリのある解説を行い、この趣旨が達成できるよう努力した。

7 広報活動

(1) ネーミング

新企画であることから、インパクトがあり、覚えやすく、ワクワクする響きという観点で、「ミュージアム・ナイト・ツアー」とした。また、当館で人気があり、よく周知されているイベント「博物館探検隊」をもじった「日帰り探検隊」をサブタイトルとして付加した。広報名称は「ミュージアム・ナイト・ツアー(日帰り探検隊)」である。

(2) 広報の手段と内容

当館の他のイベントと同様である下記の広報を行った。



図6 館内掲示用ポスター

- ①FMぐんま「情報トッピング」出演
群馬県エリアのFM局で、18：00頃から4分程度、アナウンサーとの応答形式で放送。放送日9月22日。
- ②ラジオ高崎出演
旧高崎市エリアのFM局で、8：27から4分程度、アナウンサーとの応答形式で放送。放送日9月22日。
- ③当館イベントカレンダー2006下期版
- ④企画展チラシ
- ⑤企画展ポスター
- ⑥上毛新聞
県有施設のイベント紹介欄に掲載。掲載日9月7日。
- ⑦当館インターネット
文字情報だけの掲載。
- ⑧館内掲示
ポスター2枚（エントランス、常設展示室）、チラシスタンド（エントランス）にチラシを設置。

以上のグループであった。なお、一人での参加はなかった。

実践結果

1 申し込み状況と参加状況

10月7日分は電話受付を開始後、数時間で定員に達し、10月14日分は2日後、10月21日分は翌週に定員に達した。追加開催となった11月11日分は、10月11日8:30に受付を開始し、3分で定員に達した。

表3 受付・参加状況

期 日	募集数	受付数	参加者数
2006.10.7	30名	32名	28名
2006.10.14	30名	31名	28名
2006.10.21	30名	33名	24名
2006.11.11	30名	32名	32名

2 アンケート結果

各回ごとにツアー終了後、質問紙法によるアンケート調査を行った。参加者に幼児がいたこともあり、全調査でなく任意調査とした。図7に記入済み調査用紙を示す。なお、質問項目3、4は、2回目から加えた。

(1) アンケート回答率

全体で回収率86%であった。

表4 アンケート回答状況

期 日	参加者数	回答数	回答率
2006.10.7	30名	26名	87%
2006.10.14	28名	20名	71%
2006.10.21	24名	23名	96%
2006.11.11	32名	29名	91%
合 計	114名	98名	86%

(2) アンケート結果

調査結果の抜粋を以下に示す。なお、各回ごとに大きな差異が認められなかったため、総計で示す。

図8、9によると、参加者の8割強が中学生以下の子どもを連れた親子連れであり、他は30代のカップルや50代

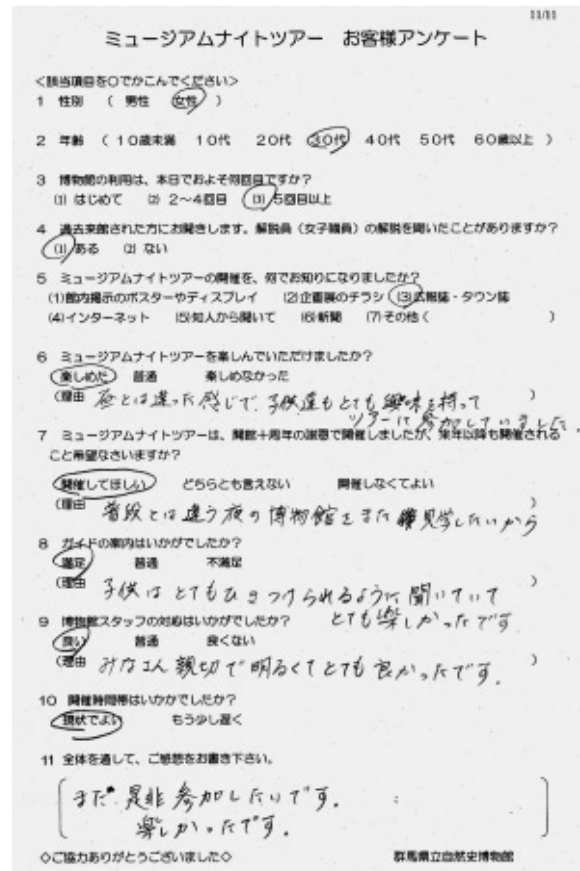


図7 アンケート調査用紙

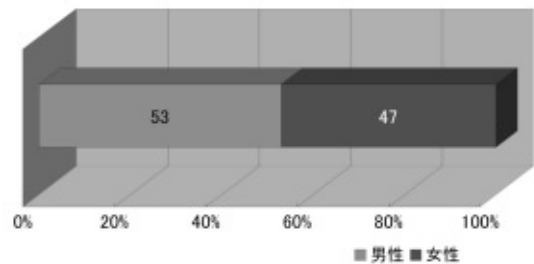


図8 項目1：男女比

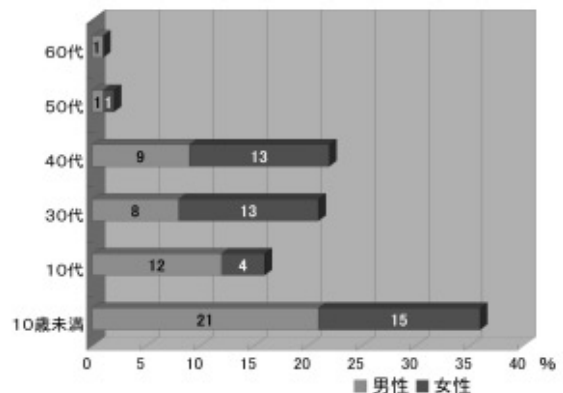


図9 項目2：年齢構成

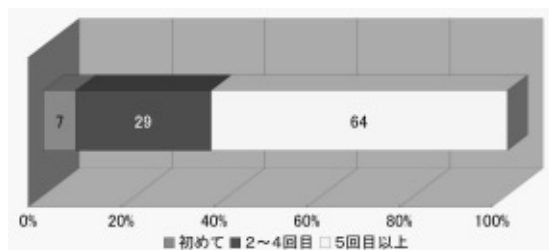


図10 項目3：来館回数

企画段階では、参加者の半数程度がリピーターである想定していたが、図10に見られるように、参加者中のリピーター率は93%であった。さらに、64%が5回以上来館していた。これは、当館友の会会員が多く参加したためと考えられる。

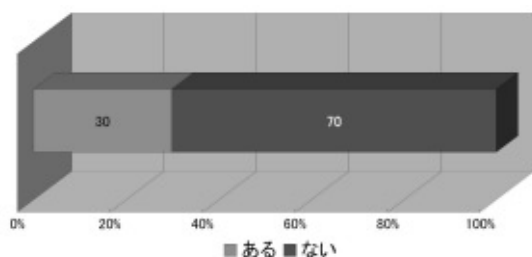


図11 項目4：展示解説の経験

展示解説の経験を伺った設問では(図11)、当館展示解説員が行っている解説を聞いたことがない人が70%であった。回答を細かく分析した結果、解説を聞いたことがないリピーターは、2～4回来館で76%、5回以上で67%であった。

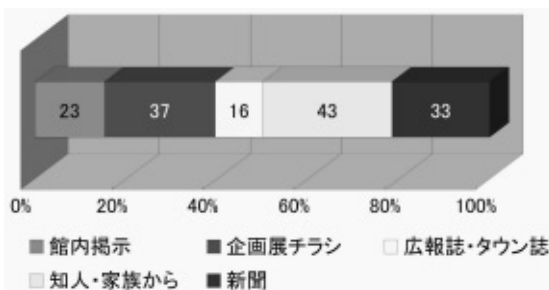


図12 項目5：企画を知った媒体

本企画を何で知ったかを伺う設問(図12)では、知人・友人の口コミが最も多く、次に企画展チラシが続いている。わずか2枚の館内ポスターも23%と有効であることがわかった。なお、図に記入していないがインターネットで知った人は0であった。

ナイトツアーを楽しめたかの否かの設問では(図13)では、回答者すべてが、楽しめたと回答した。

ガイドの案内については(図14)、満足が98%、普通が2%であった。普通と答えたのは、10代男性と40代男性の2名で、理由の記入はなかった。

スタッフの対応については(図15)、よいが96%、普通が4%であった。普通と答えたのは、10歳未満男性2名、10代男性1名、40代男性1名の4名で、理由の記入は1名(10歳未満男性)のみで「ちゃんと面倒をみてくれた」であった。

ツアー全体の感想については(図16)、楽しかった(26%)、解説がよかった・よくわかった(21%)など、全体として好印象のコメントが多かった。9%を占める“その他”の内訳は、「雨で星が見えなかったのが残念」というツアーの最後に行った天体観望ができなかったことに関するものが4名、「小学1年生も満足した」が2名、「休憩が欲しかった」が1名、意味不明が2名であった。

考察と今後の課題

1 考察

(1) 新たな企画の提供(趣旨①)について

リピーターの多い当館にとって、既存の展示解説とは異なる解説が必要であると考え、本企画を実施した。その理由の一つに、“リピーターは既存の展示解説を何度か聞いていて、新たな解説を求めている。”と考えていたからである。しかし、アンケート結果で触れたように、5回以上の来館者でも解説を聞いたことのない人は67%であった。したがって、既存の展示解説を聞いているリピーターに、新たな解説サービスの提供をするという趣旨①の視点は、成り立っていなかった。ところが、まだ“ナイト・ツアー”を一度も実施していない段階から申込者が殺到し、定員が埋まったしまったこと、参加者のリピーター率が93%であったことから、当館のリピーターが新しい企画を強く待ち望んでいたことが明らかとなった。なお、この調査で明らかとなった既存の展示解説の現状を詳しく調査し、その要因分析と対策を早急に行う必要がある。

(2) ともに体感する展示解説(趣旨②)について

本企画は、解説者による“知識の伝達”から解説者自身の驚きや喜び、怒りや嘆きなどの感情表現による“体感の伝達”を主に用いた。そのため、参加者の感情移入がしやすい解説者として、ガイドは博物館職員のお〇さんではなく、インディーやジャックとして認知されることが必要であった。ツアー中にガイドがインディーやジャックと呼ばれていたこと、ツアー終了後のガイドとの記念写真撮影の様子、アンケートの記述欄の総記入203中の12にインディーやジャックの名が好意的に記入されていたことから、ガイドは参加者に役として十分認知されていた。また、ガイドもその役に成り切ることで、恥じらいを捨て実感を込めた演技や解説を行うことができ、参加者をツアーに引き込むことに繋がった。

図14でも触れたとおり、ガイドへの満足度は高かった。その理由記述欄には「とても分かり易く楽しかった。」「子どもはとても引きつけられるように聞いていて、とても楽しかった。」「わかりやすく、おもしろい。」などが記入され、「解説がわかりやすい」、「楽しい」、「面白い」の3観点の記述を合わせると71%であった。これは、ガイドの実感を込めた演技が参加者に伝わり、参加者ともに感じる共感的な伝達の解説が少なからず行っていたため

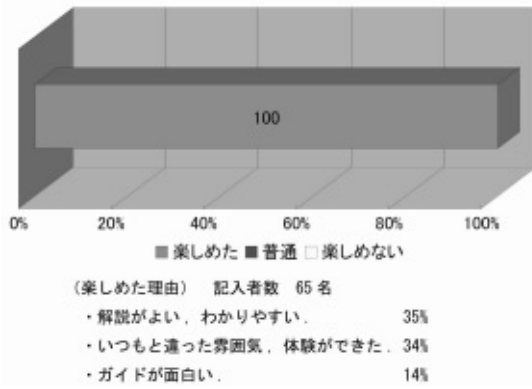


図13 項目6：ナイトツアーを楽しめたか

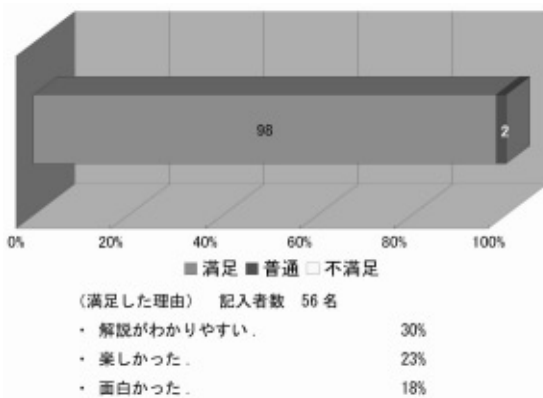


図14 項目8：ガイドの案内はいかがでしたか

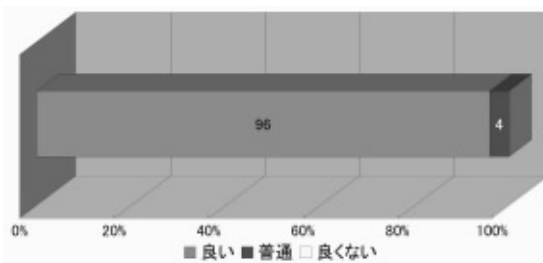


図15 項目9：スタッフの対応はいかがでしたか

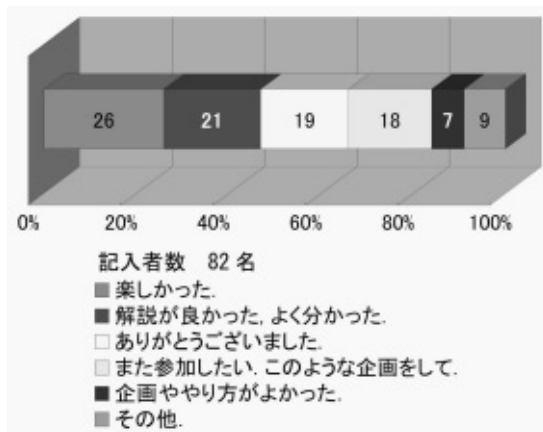


図16 項目11：ご感想を…

である。しかし、「解説がわかりやすい」の30%に対し、「楽しい」と「面白い」の合計が41%であることを考えると、体感できる解説方法の改善がさらに必要である。

(3) エンターテイメント的要素 (趣旨②) について

(2) で述べたガイドの役設定や演技も、エンターテイメント的要素であるが、ここでは、それ以外の主な演出について考察する。

まず、懐中電灯を使った照明効果では、暗い展示室にしたため、参加者の視線は自然と懐中電灯の光で照らされた展示物へと注目し、ガイドの解説に引き込まれる誘因となっていた。また、懐中電灯の光を使って隕石の落下をイメージさせるなど展示物を照らす以外の目的でも使用し、演出効果を得ていた。懐中電灯に関するアンケート記述は1点で、「懐中電灯で照らしていて、とても迫力があつた。」であった。

ボン・ベッド (図5) で行った“突然ガラスの板上に立っていることに気づく”という演出は、参加者からあがる喚声にその満足度を感じた。また、「ガラスのところがおもしろかった。」「いつも見ていた展示物がよくわかりました。ワクワク、ドキドキしました。」などの記述からも、演出の効果があつたと考えている。また、減光や突然の驚きを与えるこれらの演出は危険を伴うため、企画段階から参加者の安全面に十分な配慮をしてきた。幸い一度の事故もなかったが、演出の効果が安全の確保のもと成立するよう、想定される危険の洗い出しとその防止策に十分配慮しなければならない。

その他に、丘陵帯ジオラマと音声端末を組み合わせた“聞こえてくる鳥の声・カエルの声”，追加標本をエレベーターに隠した“大扉をあけると巨大水晶”，企画展の生体展示を利用した“肺魚の食事”，参加者を導入時に高揚させる“盛り上げるガイドダンス”を行った。“聞こえてくる鳥の声・カエルの声”では、鳴き声が聞こえてくるとその音に聞き入り、鳴き主を求めてジオラマ内の剥製を真剣に探す子どもや大人の姿が多くみられた。しかし、音声端末を操作するアシスタントとのタイミングを誤ったときには、その効果が減少する様子が見られ、コンビネーション不足の場面も見られた。“大扉をあけると巨大水晶”では、大扉があることさえ知らない参加者の中から、扉が開いた瞬間喚声があがった。もちろんフォークリフトに乗った水晶の大きさにも圧倒されていた。しかし、参加者にさらに満足していただきたい一心から、危険を伴うフォークリフトが載っているエレベーター内に誘導してしまったケースもあり、ツアーの安全基準を厳守する共通理解が不十分であったことを反省している。“肺魚の食事”では、肺魚がやっとならんと参加者から自然と拍手が湧き起つた。参加者全員で一つのことを期待し、それが達成できるとその場にいる全員に一体感が生まれる貴重な演出であることに気づいた。しかし、餌を食べなかったことが1度あり、このようなケースに、他の演出を即座にバックアップとして行える準備をしていく必要があつた。“盛り上げるガイドダンス”では、パワーポイントによるビジュアルなスライドショー、参加者の拍手と呼び声の高まりを待って客席の裏手から登場するガイドなどの演出により、参加者が積極的

になって楽しめる能動的な準備ができたと考えている。それは、ツアー開始時に参加者が見せる期待感をガイドとして十分に感じられたことやアンケートの記述に「何とか楽しめるよう盛り上げようという工夫が感じられ、好感を持ってました。」などがあったからである。本企画のような参加体感型のイベントでは、想定したように導入部における演出が重要であった。しかし、今回のガイダンスが最良と言いつけることはできない。より効果的な演出を模索する必要も感じた。

(3) 自然に関する興味・関心を高める解説ストーリー（趣旨③）について

この趣旨に関するアンケート調査項目はない。しかし、記述欄記入者の約3割（図13, 14）が、「解説がわかりやすい。」と書いていることから、この趣旨は、ある程度達成できたのではないだろうか。「特別に、ゆっくり見られて嬉しかったです。人が自然に対して、これからどうしてゆくか考えさせられました。」「普段見過ごしていた展示物も説明を聞きながら見ることにより、いっそう素晴らしいものとなりました。」「年代ごとにわかりやすく話を下さり、本日が一番よくわかりました。楽しく館内を見学できました。」などの記述からも、展示物に対する理解がより深まったことが伺える。

(4) 広報戦略（趣旨④）について

新しい企画であることから参加者が定員を満すか懸念していた。しかし、結果として定員を大幅に上回る申し込みがあった（表2）。これは、ネーミングのよさや館内に掲示したポスターを工夫したことも多少の効果あげている。しかし、他のイベントとほぼ等しい広報を行ったにもかかわらず、申込者が殺到し参加者の93%がリピーター（図10）であったことから、当館のリピーターは新しい企画を待ち望んで当館の広報をチェックしていることが明らかとなった。今さら気づくという恥ずかしさとともに、この有り難い現状を視野に入れ、今後のイベント活動を行っていくことが重要であるといえる。

2 今後の課題

今回は、初めての企画であり、参加者も“ナイト・ツアー”の多くの至らなかった点を見過ごしてくれたと思われる。企画も2年目以降となると、参加者の中に経験者が生まれ、よかったときの思い出と比較される。思い出よりもよいものを提供するには、年々質を高めていくことが不可欠である。今後の課題を一文で網羅すると“「今年も参加してよかった。」と感じていただけるツアー”を提供することである。そのためには、つぎの課題を克服していかなければならない。

○解説練習を積み、熱意のあるより高い解説力と演技力を持ったガイドを育成し、解説がわかる、解説が面白い、解説に引き込まれるという評価を高めていく。

○忌憚のない意見交換を行い、スタッフ個々の持つ経験やアイデアを企画の中に取り込み、エンターテイメント的要素が開催年ごとに変化し改善していく企画とする。

○参加者の対象を絞り、その対象に合わせることでより効果的な解説ができるツアーを行う。例えば、親子のためのナイトツアー、大人のためのナイトツアー、カップルのためのナイトツアー、お年寄りのためのナイトツアーなどである。

○解説がよかった、展示物がよくわかったという評価を得ることを目的とし、そのための手段としてエンターテイメント的要素を考える。

○参加者の年齢や身体等の要素も踏まえた上で、危険な箇所や危険な状況を想定し、事故が絶対に発生しないよう十分な手段を講じる。

おわりに

今回のエンターテイメント的要素を伴う試みは、“真面目な”公共施設の教育普及活動の視点から見ると邪道に思われるかもしれない。しかし、従来の解説を含めた展示では、展示室に置かれた標本が持つ学術的面白さが、観覧者に十分に理解されているとは思えなかった。それは、パネルを読まない人、ただ聞くことだけを強要される解説を嫌う人は少なくないと感じていたからである。展示室の中にこれら以外の伝え方が存在することが大切であり、目指す目的が同じであればそれがエンターテイメントであってもよいと考えていた。今回、エンターテイメント的要素を伴った学びであるミュージアム・ナイト・ツアーをその一例として試行してみた。幸い参加者99%の方が、来年の開催を希望してくれた。そのことだけでも博物館展示解説の一つの新しい方向性を示すことができたと考えている。

おわりに、本企画を継続し発展させる意欲をいただいたコメントを紹介する。「いつも見ていた展示物がよくわかりました。ワクワク、ドキドキしました。」（10歳未満女性）、「博物館を前より身近に感じられた。」（30代女性）、「多くの方々に博物館を知ってほしいです。」（40代女性）

謝 辞

この企画が実施できたのは多くの方々の熱意と善意があったからである。長谷川善和館長には、今まで当館で行ってきたものと異なるこの企画の実施を許可していただいた。スタッフの皆様には、快く企画の段階から加わっていただき、立案から解説練習、そして運営と多くの時間とエネルギーを割いてくれた。ボランティアとして加わってくれた展示解説員と案内員の皆様には、ツアー補助員として参加者のお世話をさせていただいた。

ここに記し、厚く御礼を申し上げる。

引用文献

群馬県立自然史博物館年報（2002）、（2003）、（2004）、（2005）